太平記の落首

――南北朝期のコミュニケーション

中西靖忠

はじめに

太平記の成立について、山下宏明氏は「作者は京童的な位置を占める」(1)という。これは面白い観方である。また太平記が当時の時代や政治を鋭く調刺した落書、落首を数多く収録したことは、この軍記物語の特色である。落首が公衆の面前に堂々と掲げられたのは、この時代から始まったのだろう。

王朝貴族の文化体制はくずれて、経済的にも芸能面にも、武士はいうまでもなく、下層の民衆にまで活気がみなぎった。自由狼籍といいバサラというも、解放された人々のエネルギーの表現といえる。新しい価値観が芽ばえ、実力がものいう時代への大きな希望に燃えた転換期であった。

そうした時代の空気を、公家でもなく武家でもない自由な“京童„が感知していた。口さがないといわれる京童は落首したり、あるいは落首をいい伝えたことが太平記の記事からうかがわれる。

60年にわたって京都、鎌倉はもとより全国を動乱と混迷に陥れた南北朝時代は、社会的なコミュニケーションの興った時代であり、“世論„の発生もあったとみられる節がある。それは次の政治体制―封建政治ができるまでのほんの短い期間であったといえる。文字も印刷もなかった時代の、新聞的な言論活動の役割をしたのが落首であったといえるのではあるまいか。

（テキストは特にことわらないかぎり、岩波書店の日本古典文学大系本による。従って太平記の底本は慶長８年古活字本である）

戦火の中の落首

元弘元年（1331）になると後醍醐天皇の北條幕府覆滅の計画は隠れもない現実になっていた。８月鎌倉の２人の使者が上洛するというので、京中何となく、以てのほかの騒動ぶりであった。人々は情報に神経をとがらしていた。

「両使已ニ京着（きやうじやく）シテ未（いまだ）文箱ヲモ開ヌ先ニ、何トカシテ聞ヘケン。『今度東使ノ上洛ハ主上ヲ遠国ヘ遷進セ、大塔宮ヲ死罪ニ行奉ン為也』ト、山門ニ披露有ケレバ」（巻２）と情報は洩れ、大塔宮護良親王の連絡で、天皇は急ぎ笠置に臨幸になる。北條方は討手をさしむける。これが戦乱の発端であった。

宇治に向った軍は９月２日を攻撃日と予定していたが、高橋又四郎はその前日「独り高

名ニ備ヘントヤ思ケン」抜けがけするが、木津川で大敗し「赤裸ニナリ、白晝ニ京都へ逃上ル」見苦しさであった。

①木津川ノ瀬々ノ岩浪早ケレバ懸テ程ナク落ル高橋の一首の歌が平等院の橋詰に立った。太平記では巻3、初出の落首で「是ヲ悪シト思フ者ヤシタリケン」とある。

ところが高橋の抜がけを聞て、入替って手柄をたてようと続いて出た小早河も、一度に追ったてられて陣を立直すこともできず、宇治まで退却した。そこでまた一つ札が立添えられた。

②懸モ得ヌ高橋落テ行水ニ憂名ヲ流ス小早河哉

ろくに攻めもできない高橋が逃げ落ちてゆくのと一緒に逃げて汚名を流す小早河だわい、と無力者の高望みをニクシとし、嘲笑したのである。

自害と見せかけて一たん赤坂の城を退いた楠正成が元弘2年4月再起した。六波羅は隅田・高橋2人を軍奉行にして5千騎を討伐のため大阪に差向けた。5月21日天王寺の合戦は正成の作戦勝ちで、淀川の渡部橋に追い落され、這々京へ逃げ帰った。（巻6）

「其翌日ニ何者カ仕タリケン、六條河原ニ高札ヲ立テ一首ノ歌ヲゾ書タリケル」

③渡部ノ水イカ許早ケレバ高橋落テ隅田流ルラン

正成が赤坂の城を奪還し和泉河内を従わせて、住吉・天王寺に出陣したと聞えたとき、明日にも京都へ攻上るかと洛中は騒動した。大軍を集結して待っていたのに正成は攻め上らない。それで大阪へ討伐のため出陣したのだから、京中の貴賤上下が注目していた合戦だった。渡辺橋から京都までほぼ10里余(京都－大阪駅42.8㌔。)。午後早く戦いが終ったとして、敗戦の報は急ぎ届けられ、高札の落書は文字通り速報といえる。

このあと「京童ノ僻ナレバ、此落書ヲ歌ニ作テ歌ヒ、或ハ語伝テ笑ヒケル間、隅田・高橋面目ヲ失ヒ、且ハ出仕ヲ逗メ、虚病シテゾ居タリケル」と続けている。2人は撿断として市中の警察権をにぎり権勢をほしいままにしていたから、平生から市民に目のかたきされていたこともあろうが、同僚の武士仲間からも憎まれていた。そのため苦戦しているのに、ざまあみろとばかり他の部将が傍観していたというエピソードもあるぐらいだ。

以上は負けて帰ってきた腑甲斐ない部将の名が詠みこまれ、揶揄されている。それにしてても明日戦場になるかも知れない京都を防ぐために出陣した軍勢だ。いかにのんきな個人戦的な時代とはいえ、関東勢は騎馬による集団戦でも知られ、戦場となると兵火にかかることも、蹂躙されることも予想されるのに、多分に落首は楽観的である。戦火が迫っている地に住むものの緊迫感がない。朝廷、武家方どちらが勝つかと好奇と期待、多分に野次馬的にみえる。時の権威ともかかわりを持たぬ第三者の立場にみえる。

それが時代が足利一門の内部抗争となり、京都から距離が離れると、一層平静で客観的となる。巻38では康安2年（1361）で諸国宮方蜂起のことを伝えている。尊氏の子で直義の養子の左兵衛佐直冬は宮方に属して石見国から備後の宮下野入道を攻めて、またまた大敗する。

「然共、直冬一度モ未打勝給ヒタル事ナケレバ、無云甲斐ト思フ者ヤシタリケン。落書ノ歌ヲ札ニ書テ、道ノ岐ニゾ立タリケル。

㉕直冬ハイカナル神ノ罰ニテカ宮ニハサノミ怖テ逃ラン

侍大将ト聞ヘシ森備中守モ、佐殿ヨリ前ニ逃タリト披露有ケレバ、高札ノ奥ニ、

㉖楢ノ葉ノユルギノ森ニイル鷺ハ深山下風ニ音ヲヤ鳴ラン

㉖戦う相手が宮という武士なので神の罰といいかけた。宮ノ下野入道、道山は下野守兼信ともいう。将軍方の豪傑で勇戦ぶりは諸所に出ている。備後国品治郡一宮、吉備津神社神官。この戦いの前に直冬が禅僧を使者として宮に同心をすすめるが、宮は「味方する者がなくなって頼むといわれるならともかく、勢盛んないま申入れられるのは何事か。またこういう使者にはしかるべき武士をこそ立てるべきだのに僧体を寄越すとは何事か」と手きびしく批判して追い帰している。

㉗森という苗字にかけて、ユルギの森を導き出した。枕草子や古今六帖に見える鷺の名所で、備中守を鷺にたとえた。

直冬は宮になぜそのように恐れを抱き逃るのか、森はさぞ泣いているだろう、といった内容に過ぎない。

直冬は佐々木道譽を恨んで宮方に奔った山名時氏に総大将にかつがれていた。(巻32) 尊氏の二男だが、なかなか認知してもらえなかったいきさつがある。西國探題となり、九州に逃げ、この時中国地方を放浪していた。将軍に敵すれば、子として父を譴るとがあり、天子に対すれば臣として君をないがしろにすることになると一応悩む。それも吉野朝の宣旨を受けると、天の忿り人の譏りを受けることもあるまいと判断して宮方になった。文和4年（1355）政略した京都を確保できなくて、八幡に引き退いて石清水八幡の神託を乞うた。その時の神歌は

タラチネノ親ヲ守リノ神ナレバ此手向ヲバ受ル物カハ（巻33）

で、この神託を聞いた諸将はこの人を大将にして将軍と戦うのは見込みがないとそれぞれ帰国してしまう。直冬が敗けつづけるのは不思議だなあ、神罰を受けるようなことがあるのだろうかという底には、直冬のことが一般に知られていたということであろう。

この文和4年の「京軍事」で宮方の直冬が本陣とした東寺の門に、撤退の翌日落首があった。

⑰兎ニ角ニ取立ニケル石堂モ九重ヨリシテ又落ニケリ

石堂は直冬に加勢して取立てた石堂頼房。石堂(塔)、立てる、九重は塔の縁語、九重の塔の九重には京都の都の意がかかっている。

⑱深キ海高キ山名ト頼ナヨ昔モサリシ人トコソキケ

山名時氏は深い海、高い山ように本当に頼りになる人ではありません。深く信頼してはなりません。昔も京都を逃げ去った人と聞いています。

⑲唐橋ヤ塩ノ小路ノ焼シコソ桃井殿ハ鬼味噌ヲスレ

唐橋は東寺の西、塩小路は北にあった地名。合戦で焼けたのは桃井直常殿が焼味噌をするからだ。唐は辛にかけ、味噌に辛味と塩を加えて焼くのが鬼味噌。

桃井播磨守は京都を焼いた悪者になっている。直冬にずいぶん力を入れた石堂も逃げた。直冬さん、山名を頼りにしてもダメだという以上の中味はない。それにしてもまあなんと敗れた者ばかりが嘲笑されていることか。勝敗は時の運とはいいながら、落首の材料にされてはたまらない。強くていさぎよく、卑怯未練でないことが尚ばれる時勢だったのだろう。

⑧二筋ノ中ノ白ミヲ塗隠シ新田々々シゲナ笠符哉（巻15）

足利氏の文“二ツ引両”は○に二本棒、新田氏は“大中黒”で円に一文字の黒線を引いたもの、二筋の中央の白地を塗りつぶして降伏者は大中黒にみせかけている。

これは降参した下級の武士たちの行列を目のあたり見たものの作であろう。「おかわいそうに」の気持もにじんでいる。建武3年（1336）新田義貞らは逆臣を尊氏京都から、さらに兵庫から九州へ追い落した。その時の降人1万余騎を召具して2月8日京都に凱旋した。義貞は「天下ノ士卒ニ将トシテ花ノ都ニ帰給フ。憂喜忽ニ相替テ、ウツツモサナガラ夢ノ如クノ世ニ成ケリ」だった。ことの体ゆゆしき行列の中に墨の濃き薄きで笠の紋の書

直しがはっきりわかる一群、新田勢らしくとりつくろったあとが歴然としていた。次の日この歌は五条の辻に高札に書かれた。

生々しい戦いの空気を伝える落首はこの一首といえる。作者はこの敗残の兵たちの仕業を鋭く諷刺しているが、本心から揶揄の対象にしたのであろうか、私は決論を出しかねている。

それから3ヵ月、2月末に改元されたから延元元年5月尊氏は大挙して攻め上ってくる。義貞と正成は兵庫に迎え撃っが、正成兄弟は湊川で自害する。建武中興を成功させた原動力になった正成はその武略で民衆の喝采を浴びていたし、智仁勇三徳兼備の名将として人望があった。

正成の首が京都に届いた。「六條川原ニ懸ラレタリ。去ヌル春モアラヌ首をカケタリシカバ、是モ又サコソ有ラメト云者多カリケリ。

⑨疑ハ人ニヨリテゾ残リケルマサシゲナルハ楠ガ頸

ト、狂歌ヲ札ニ書テゾ立タリケル。（巻16）

人によっては疑いが残ろうが、楠の首はほんものらしい。正シゲと正成の人名をかけて狂歌と仕立た。

「去ヌル春」とは尊氏が反旗を飜して関東から京都に入ったこの年の正月のこと。都はいくたびかその主を代えるほど激戦がつづいた。正月27日の合戦のあと正成は山門の僧2,30人を市中に放って謀略に使った。「官軍の主だった人7人まで討たれた。供養のため死体を捜している」と触れさせた。尊氏方は「面影ノ似タリケル頭ヲ二ツ獄門ノ木ニ懸テ、新田左兵衛督義貞・楠河内判官正成ト書付」けた。それに対して落書があった。太平記は「其札ノ側ニ、『是ハニタ頸也。マサシゲニモ書ケル虚事哉』ト、秀句ヲシテゾ書副テ見セタリケル」といい、さらに「如何ナルニクサウノ者カシタリケン」と、心にくいしゃれ者がやったとする。この秀句こそ落書らしい落書といえる。⑨の歌は正成の首とは信じたくないが、やっぱり正成なんだ、正成は戦死したのだと知らせ、納得させる気持と追悼の意が籠められている。

以上は戦闘に関係ある作品で、戦争を見物できた側からの落書を拾いあげたものである。

そのほか少数ながら戦闘に参加した者が詠んだ落首がある。

北条方は千早城に籠る正成を攻めあぐんだ。攻めて戦果があがらないと「諸人ノ口遊ハ猶不止」のありさま。進んで攻めようとする者もない。兵糧攻めにしようという方針になって包囲軍は退屈した。このとき花の下の連歌師を呼び寄せて、一万句の連歌が行われた。長崎九郎左衛門師宗の発句は

サキ懸テカツ色ミセヨ山櫻

脇を付けたのが工藤二郎右衛門尉

嵐ヤ花ノカタキナルラン

だが、敵を嵐にたとえるとは、縁起が悪いじゃないかという一幕もあった。一方では連歌、あるいは碁、雙六、百服茶、褒貶の歌合などさまざまの遊びに日を過すが、「諸国ノ軍勢唯徒ニ城ヲ守リ上テ居タル計ニテ、スルワザ一モ無リケリ」の有様であった。「爰ニ何ナル者カ讀タリケン、一首ノ古歌ヲ翻案シテ、大将ノ陣ノ前ニゾ立タリケル」（巻7）

④余所ニノミ見テヤヤミナン葛城ノタカマノ山ノ峯ノ楠

本歌は新古今集巻11、恋。「よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峰の白雲」を翻案して、楠木をよそにのみ見て終るわけにいくまいとの皮肉。

巻15、三井寺合戦で“生身の弥勒”と称される本尊の首が三井寺の僧にきられ、藪の中に隠された。三井寺側はそのころの武士なみに本尊の首を奪われるとあわてたのだ。「山法師ヤ仕タリケン、大札ヲ立テ、一首ノ歌ニ事書ヲ書副タリ」とある。

⑦山ヲ我敵トハイカデ思ヒケン寺法師ニゾ頸ヲ切ルル

延暦寺の僧徒が本尊になり代って、弥勒の心境を歌い三井寺の衆徒を諷したのだ。

延元元年7月京都は決戦の色を濃くしていた。東山の阿弥陀が峯でたく官軍の篝火は夜々ふえるばかりである。尊氏の本陣である東寺の楼門に上った兵士が「アラヌビタタシノ阿彌陀ガ峯ノ篝ヤ」ト申ケレバ、高駿河守トリモ敢ズ

⑩多ク共四十八ニハヨモ過ジ阿弥陀峯ニ灯(とも)ス篝火

ト一首ノ狂歌ニ歌成シテ戯ケレバ、満座皆ユツボニ入テゾ笑ケル」（巻17）

阿弥陀の本願は48ある。とっさに駿河守が狂歌にしたので、その場の緊張と不安はほぐれて快く笑った。⑦の山法師といい、駿河守といい、あわただしい戦火の中にあって、機智もあり、余裕もあったエピソードである。

落書・落首の流れ

太平記というと児島高徳が、院庄の宿舎へ忍びこんで桜の幹を削って詩をしるし、遷幸の後醍醐天皇に志を伝えた故事を思い出す。巻4に出ているが

天莫レ空二勾践一。時非レ無二范蠡一。

だが、警固の武士には解りかねて、上聞に達すると天皇はにっこりされたという。これなどまことの落書であろう。

辞書などによると、落書とは政治、社会の事件や個人の言行に対する諷刺または嘲弄の意をこめた匿名の文である。狂歌の体裁をとることが多く落首ともいわれるとある。

道聴塗説を聞いて政治に反映するのは中国古来からの政治家の要諦であり、民の声は天の声とされた。落書となると文字ができてからのことである。「壁の落書は唐代より有り」といったのは「甲子夜話」の著者松浦静山だが、わが国でもずいぶん古くからあり、江戸時代にも、また現代にも行われている。

わが国の文献上、最古のものは垣武天皇延暦16年(797) 編集された続日本紀の天平21年(749) 2月20日の条「以朝庭路頭屢々投匿名書、下詔教誡百官大学生徒以禁将来」朝廷の庭や路上に落書するものがあり、詔を下して百官や大学生を誡め、禁止したという記録である。(2)

「宇治拾遺」三に出ている「小野篁（802－852）広才事」は江戸時代の笑話集「きのうはけふの物語」に引用されて「落し文よむ所にとがあり」となっている。

51代嵯峨天皇（786－842）の御代に「無悪善」と落書したものがいた。物識りの学者を集めてなんと読むかと研究したところ篁は「無(なば)レ悪善(さがよからむ)」と読んだ。他人が読めない難文を読めるのは、その当人が書いたに相違ないとなった。時の天皇嵯峨を謗った不敬極まる文である。「さだめて其篁がたてつらん」といわれるから大変だ。篁は「物を識り候へば結句罪科に行はるる事迷惑」と陳弁、「子子…」と子を12並べた難文を「ねこのここねこ、ししのこ子じし」と読んで罪を免れたという話。

菅原道眞（845－903）の時代にも大納言を謗った匿名の詩が流布し、それがあまりに上手にできているので、道眞が疑われた。道眞は“詩情怨”を賦し、菅著作、紀秀才に示し

て「去歳世は驚く詩を作ることの巧なることを……我をなじって終に実の落書となす……今年人は謗る、詩を作ることの拙きことを……」などと嘆いている。（菅家文章巻２）

藤原明衡撰の「本朝文粋」には落書の一項があり、桜島忠信が「官職が金で買われている」と落書して、結果大隅守の官を得たという話を載せている。

しかしそれらを見てみると、多くは個人的な意図から発し、他人への嫉みとか中傷の私情に堕している。自分の出世を売りこむとか、陰湿であり卑陋である。諧謔もあり戯画化などのみんなにみせての明るい、いたずらっ気が出せる時代ではなかった。

太平記でこれに類する落書といえば巻22の足利高経の越前鷹巣城攻めに出てくるものだろう。籠城しているのは小勢ながら勇敢で機略のある畑六郎左衛門時能である。奇襲を防ぐために畑に糧食を内々に差入れる者もあった。上木九郎家光もその一人だったが、内通しているの噂が広まった。大将の陣の前に高札が立てた者がいる。「畑ヲ討ント思ハバ、先上木ヲ伐ト云秀句」が書かれていた。人名を植木とかけ、畑を打つならまず植木を切ってからというもの。周囲の冷たい目を気にした上木の一族は敵陣に突入して行った。共同で戦線を張っていて、内応者が出ることは全軍の死命にかかわるので、この落書が私情から出たものとはいえないが、個人攻撃の典型的なものである。

勢力者、自分より地位の上のものを批難したり、嘲笑したりすると危険は覚悟しなければならない。権勢者は特に恐れなければならぬから、匿名であり、匿名であることがより辛辣味をます。誰の仕業ともわからぬように行動も要求される。

事実、巻26では時の執事師直の弟、越後守高師泰が、無実の菅三位を殺している。師泰は東山の枝橋という所に山荘を建てようとした。そこは菅宰相在登（のり）の所有地で、菅原家代々の墓所があり、移転するまで工事を待ってほしいという願いを無視して、墓地を掘崩しはじめた。見かねた人がいたのであろう。「是ヲ見テ如何ナルシレ者カ仕タリケン、一首ノ歌ヲ書テ引土ノ上ニコソ立タリケル

⑬無人（なき）ノシルシノ率都婆（そとば）堀棄テ墓ナカリケル家作哉

そんな無道なことをして家を作ってもはかなし、長つづきしますまいよ。

怒った師泰は『是ハ何様（なにさま）菅三位ガ所行ト覚ルゾ。当座ノ口論ニ事ヲ寄テ差殺セ』と在登を殺させた。

ところで、この時代をもっともよく現わす落書が建武２年８月二條河原に出た。有名な“口遊”で「建武年間記」に載る。島津忠夫氏は「落書・落首」（国文学・解釈と鑑賞 昭和44・3）で「後醍醐天皇による復古の新政府がことごとにゆきどまりをきたし、自由狼籍を極めた京都の世相に奇抜な諷刺を加えている。南北時代をもっともよくあらわす文学だろう」という。

此比都ニハヤル物　夜討強盗謀（にせ）論旨

召人早馬虚騒動　生頸還俗自由出家

に始まって「天下一統メヅラシヤ」とうたい「京童ノ口ズサミ。十分一ヲゾモラスナリ」に終る88句の今様形式である。口遊みの十分の一を伝えるというが、民衆の立場から武士のバサラぶりや流行の服装、連歌、田楽、遊び、新興の芸能などを生々と伝えている。その模様は太平記の記事にも諸所で取上げている。例えば巻33の「公家武家栄枯易」地事」の

條では、佐々木道譽をはじめとする奢侈な生活ぶりを伝え「人ノ歎ヲモ不レ知、嘲ヲモ不レ顧、長時ニ遊ビ狂ヒケルハ、前代未聞ノ癖事ナリ」と、悲憤に似た批評を加えている。だが、文字を持たない京童どもが、口々に歌いはやす落書の方に影響力は強いものがあったろう。

落書とは立札もあれば、張紙もあった。立札は檄文的で世情を堂々論難するもの、落首は狭義には狂歌体を取るのだが、しばしば同じ意味に使われている。

落首にされた有名人

太平記に載せられた落首を見てゆくと、いいまわしの妙、名前などの取合せを楽しんでいる。秀句といい、飜案といい、狂歌といって、教養がなくては作れないものもあるが、民衆の、京童の作と思えるものが多い。それに高名な人物だから歌われる対象になったと思えるのもみえる。もちろん落首本来の諷刺性はあるが、スターへの興味がより表面に出ていると見えるものだ。そうしたものを選んでみる。

夢想国師、巻23

⑫イシカリシトキハ夢窓ニクラハレテ周済計ゾ皿ニ残レル

仏家の食事である斎と土岐頼遠、酢菜とその弟の周済坊とをかける。おいしかった食事は夢想にくわれ、酢づけの菜ばかりが皿に残った。「口入シ給シ事不レ叶シヲ、欺ク者ヤ仕タリケン、狂歌ヲ一首、天龍寺ノ脇壁ノ上ニ書タリ」とある。

土岐頼遠は「当代故ラ大敵ヲ靡ケ、忠節ヲ致シカバ、其賞翫モ人ニ勝レ、其恩禄モ異レ他ニ。サルヲ今浩ル行迹（上皇への狼籍）ニ依テ、重テ（夢想ノ）吹擧ヲモ不レ被レ用、忽ニ其身ヲ失ヒヌル事」と書かれている人物である。頼遠は興国3年(1342)笠懸射をしたあと大酒をのんでの帰り、伏見院の法要をすまして帰られる上皇の行列と行きあった。「院の御幸ニテゾ有ゾ」というのに「此比洛中ニテ、頼遠ナドラ下スベキ者ハ覚ヌ者ヲ、如何ナル馬鹿者ゾ」とののしり、さらに「何ニ院ト云フカ、犬ト云カ、犬ナラバ射テ落サン」と御車を真中にして追物射に射かけた事件である。直義は三族を罪するという。ついに頼遠は朝廷武家ともに崇敬された夢想にとりなしを頼んだ。直義は夢想の申入れを無視できなくて、死罪ときめていた周済ばかりを助命し、頼遠を六條河原で処刑した。事件が事件だけに夢想のあっせんがどう落着くか注目を集めていた。この結着に「天地日月未変異ハ無リケリトテ、皆人恐怖シテ、直義ノ政道ヲゾ感ジケル」と結んでいる。

梶井宮、巻27

後伏見院の御子で光厳帝の弟。南北の戦況によって、いくたびか天台座主になった法親王。獅子、田楽、舞いを愛好し茶、連歌をするなど無類の遊びずきで評判だった。

貞和5年（1349）6月11日四條橋勧進のための田楽は大へんな人気であった。川原に250間の桟敷が造られたが、観衆は「面白ヤ難堪ヤ、我死ヌルヤ、是助ケヨ」と熱狂したため、桟敷は将碁倒しになって地獄絵図を現出した。

「梶井宮モ御腰ヲ打損ゼサセ給ヒタリト聞ヘシカバ、一首ノ狂歌ヲ四條川原ニ立タリ。

⑭釘付ニシタル桟敷ノ倒ルハ梶井宮ノ不覚ナリケリ

釘と釘を造る鍛冶をかけ梶井と続く。

又二條関白殿モ御覧ジ給ヒタリト申ケレバ

⑮田楽ノ将碁倒ノ桟敷ニハ王許コソ登ラザリケレ

関白は　政二條良基、将碁の縁で王といった。

天皇を除いて貴賤を挙って田楽に熱中した時勢であった。北條高時の熱中ぶりは巻6に出ており、北条氏滅亡の一因を見られたが、戦乱のこの時期も京では盛んであった。上下あげての陶酔に眉をひそめる心ある人もおり、天狗の仕業との噂もあった。相承院本には二條関白を「摂家ノ長者トシテイヤシキ勧進サシキナトニ入セ給ヒヌル事浅間敷事ヤナト申沙汰アリ」また「去年ハイクサ今年ハ桟敷討死ノ所ハ同四條成ケリ」という落首もあり「此比ノ人此落書ヲロスサミ翫ハヌハナカリケリ」と記している。(大系本補註7)

叡山の後醍醐天皇に尊氏は使者を送って忠誠を誓った。義貞は恒良親王を奉じて北国へ下り、天皇は京都に還御になる。延元元年10月のことだ。(巻17)その供奉の武士の中に宇都宮公綱がいた。この和睦は尊氏の謀略で天皇は花山院に幽閉され、武士は大名に預けられる。一部は斬られ、菊池武重は本国へ逃げ下った。宇都宮は特別あつかいの囚人で、禁足されていなかった。脱出できるのに逃げ出しもせず、出家のように頭をまるめてのうのう日を過していた。

⑪山ガラガサノミモドリヲウツノミヤ都ニ入テ出モヤラヌハ

もどりをうつを宇都宮にかける。籠の中の山雀が行ったりもどったりしているように煮えきらず、宇都宮は都に入って出ることをせぬわい。「悪シト思フ者ヤ為タリケン、門ノ扉ニ山雀ヲ絵書、其下ニ」この歌を書いていた。これでは現在の政治マンガである。絵入りで落書されたことを注意しておきたい。

そのほか、「湯河庄司が宿ノ前ニ、作者芋瀬ノ庄司ト」書いた、作者名入りの落首が出た。柚に対して芋、これも絵になる。戯画化、マンガ的発想がひらめいたのではなかろうか。(巻35)

㉔宮方ノ鴨頭ニナリシ湯ノ川ハ都ニ入テ何ノ香モセズ

鴨頭は香頭ともいう。吸物に入れるショウガ、柚の皮など薬味のこと。芋瀬は吉野十津川村五百瀬、湯川とともに熊野八庄司の一つであった。南朝方ではお添物に過ぎなかった湯河は北朝方になって京都へ来ても、ばってしないじゃないか。

仁木右京大夫義長、巻35

要領のよくて、執事になっていたが、傍若無人であるとして、畠山道誓ら部将に排斥されて没落、領国であった伊勢へ逃れる。

㉒イシカリシ源氏ノ日記失ヒテ伊勢物語セヌ人モナシ

源氏の日記は仁木が清和源氏足利氏の一統であったところから。

この前書には「是ハ仁木ヲ引ク人ノ態カト覚テ、一首ノ歌ヲ六角堂ノ門ノ扉ニ書付タリ」とある。

京童といわれる者

源氏物語・夕顔の巻に、光源氏が夕顔の頓死を目のあたりにしてとまどうところがある。「しのぶとも、世にある事、隠れなくて、内(裏)に聞し召さむを初めて、人の思ひ言はん事、よからぬ童の口ずさびになるべきなめり」(古典大系本、152頁)という。無責任な童どもが、面白おかしく世間話の種にして噂をふりまくことを懸念する。よからぬ童、口ずさびの言葉が使われている。

保元物語には、忠通・頼長兄弟の勢力争いの原因を作った藤原忠実のことを「京童の申沙汰しけるは、入道殿下と申は……先規にも人望にも背きし御計なりしが……」と遠慮なく、政治の指導者を批判してはばかるところがない。よからぬ童は京童と固有名詞になっ

ている。その口うるささ、うわさ好きは京都人の特色にみられるようになる。この時代から約 250年後に関白秀次のことを「“無道の殿”なりと京わらべささやきける」と戴恩記にもでていて、口さがない京童はいぜん健在な存在である。

ところで平清盛はわが国で、言論統制というか情報を管理した最初の政治家だと思う。平家物語の巻１、禿髪の条がそれを伝えている。

「いかなる賢王賢主の御政も、摂政関白の御成敗も、世にあまされたるいたづら者などの、人のきかぬ所にて、なにとなうそしり傾け申すことはつねの習なれど……」政治に批判はつきものである。為政者の立場からすれば、それは世にあまされたいたづら者のたわいもない愚痴であり、採りあげる価値のあるものではない。清盛はそれらの口を封じるために、若者たちのグループを使った。

「入道相国のはかりごとに、十四五六の童部を三百人揃て、髪を禿にきりまはし、あかき直垂をきせて、めしつかはれけるが、京中にみちみちて往反しけり。をのづから平家の事あしざまに申者あれば……余党に触廻して其家に乱入し、資材雑具を追捕し、其奴を搦とて、六波羅へゐてまいる。されば目にみ、心に知るといへども、詞にあらはれて申者なし」

この流れを引き伝統となったものが、“京童”であろう。下坂守氏は「京童から町衆へ」(講談社現代新書)で宇津保物語の記事の“京童ときこゆる者”の発言を引いている。「おのがゆかり、西東の、合せて六百人ばかり」で搏打の仲間と匹敵する数の反体制色の強い集団とみていられるようだ。あるいは無頼の若者集団であったかも知れない。また若者が集団の力でなにかを企んでもよい可能性のある世相であったが、何かの目的、主張を持つ団結はなくて、単に批判を好む若者たちのように思われる。京童が鎌倉ワラベと並び称せられるのは、京都も鎌倉も政治の中心地だったからだ。庶民の中には政治をつねに批判する気持があり、わけても若者にはそれが強い。それを自由に表現したいと思うのは本能的なものだ。都のあった地の住人が政治に関心を持ち、上流階級の一挙手一投足に目を見張りゴシップを喜んで口にしたことは十分想像できる。そして対象にされる側の支配者や記録する知識階級は、童と未熟者扱いにし、ヲコの者といい、しれものと罵る心情もまた理解できる。

南北朝時代にあって、京童をふくめて庶民にどの程度読み書きの能力があったかわからない。書くことは出来なくても読んでもらえば、覚えたり、いい伝えることはできたであろう。それが口遊(すさみ)であり、いまでいう口コミで、人にとってはうるさい存在であったろう。

天皇をも批判

建武の新政権、それも後醍醐天皇を痛烈に批判した落首がある。（巻14）

⑤賢王ノ横言(わう)ニ成ル世ノ中ハ上ヲ下ヘゾ帰シタリケル

内裏・陽明門の扉、横言はよこしま、わがままな発言。狂歌というのは横・上・下の取合せから。

⑥カク計(ばかり)タラサセ給フ綸言(りんげん)ノ汗ノ如クニナドナカルラン

綸言汗ノ如シ、とは天子の言葉のこと。汗は一度出ると体内にもどることがないように取消すことはない。誤り偽り、二枚舌はありえない。汗をたらす、流るは汗の縁語で、たらすにだます、なかるに無、をかけている。こんなにまでおっしゃる天子様の言葉にどうして、いつわりがあろうかであり、かくばかりだましておっしゃるなんて、見えすいた嘘をいいなさるなの意味になる。

建武の親政は元弘３年（1333）６月に実現し建武２年（1335）10月の尊氏叛逆で終る。わずか２年あまりで失敗した。北條幕府打倒に功績のあった武士への恩賞の不均衡が武将

の不満を呼び、源氏の統領となった尊氏の野心を早くから見破っていた護良親王に対する天皇の不信が直接の原因だった。醍醐の御代を理想にした天皇は、はじめて紙幣を発行し、貨幣制度や土地政策に意欲を持っていたが、新しい時代に対応する行政能力のある組織をもたず、一統に必要な直率の兵力もなかった。利と力を追求するたくましい時代風潮の中で混乱し浮きあがってゆく。

没収した北條一門の所領を皇室一門で分けると残る土地はなかった。“無偏の恩化”は言葉だけとなって領地の再配分は混乱する。次に威儀を整えるため大内裏を拡張する造営がはじまり、全国の地頭、御家人の得分の20分の１を徴収した。「今兵革ノ後、世未レ安、国費ヘ民苦テ」おり、まったく太平になったといえないのに、大内裏の造営で増税するのは「神慮ニモ違ヒ驕誇ノ端トモ成ヌト、顰レ眉智臣モ多カリ」で、万事が「凡事ノ体厳重ニ見ヘテ堂々タリ、去ドモ是尚理世安国ノ政ニ非リケリ」。「哀何ナル不思議モ出来テ、武家執四海権世中ニ又成カシト思フ人ノミ多カリケリ」と民心は離反していった。太平記巻１で著者が総括した後醍醐天皇への評「誠ニ理世安民ノ政、若機巧ニ付テ是ヲ見バ、命世亜聖（聖人に次ぐ）ノ才トモ稱ジツベシ。惟恨ラクハ斉桓覇ヲ行、楚人弓ヲ遺シニ、叡慮少キ似タル事ヲ」のとおりなのである。

北条の残党、相模次郎の乱を鎮めた尊氏が宣旨を待たず征夷大将軍を称し、反旗を飜すと、これに応ずる者が全国に続出した。

「……此外五畿・七道・四国・九州、残所ナク起ルト聞ヘシカバ、主上ヲ始メマイラセテ、公家被官ノ人々、独トシテ肝ヲ消サズト云事ナシ」⑤はそのころの、上下引っくり返したような混乱ぶりを狂歌にしたもの。それは賢王の邪まな政治姿勢に原因があると衝いたものだ。「何カナル嗚呼ノ者カシタリケン」とあるが、これまで天皇の施政に心を痛めてきた忠義の臣の鬱憤に違いない。

尊氏は80万騎を引きつれて美濃に着いた。四国からも山陰道からも敵が近づくというのに都を守る兵は逃亡あいつぎ、１万騎に満たない。それも浮足だって、何方へ向えと命令しても耳に入らぬ有様である。そこで「軍勢ノ心ヲ勇マセン為ニ、『今度ノ合戦ニ於テ忠アラン者ニハ、不日ニ恩賞行ハルベシ』トシ壁書ヲ、決断所ニ押サレタリ。是テ見テ、其事書ノ奥ニ」書かれた落書が⑥である。天子に二言はない。だがさきには公平な行賞ができなかった。あわてふためいて、そんな甘言で釣ろうとする。きっと約束は守られるでしょうよと表面いいながら、皮肉と不信をあらわに出している。

太平記作者は古くから“宮方深重”の側といわれるけれども、全篇を通じて時勢の流れを見る目は透徹していて公正な態度を貫いている。

尊氏、直義兄弟が不和になって相争い、直義は毒殺される。その翌年が正平７年(1352)義詮の南朝への降伏合体の申入れを受入れて後村上天皇は八幡まで帰ってこられる。吉野を出て途中住吉神社に行幸された。その際、社頭の松が「風モ不レ吹ニ」折れて倒れる珍事があった。その夜、松の幹を削って

⑯君が代ノ短カルベキタメシニハ兼テゾ折シ住吉ノ松

と、詞花集巻５の「君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむ住吉の松」を翻案して落書した「嗚呼ノ者」がいた。妖と徳について側近に論争があり、君は徳を磨けとの進言であったのか、当時よくあった神託にかりた予言、警告なのか、よくわからない。

この時、義詮にも不利をかばうためのいつわりの降伏であり、後村上天皇も機を見て武

力で京都回復の意志があった。互にだましあっていたのである。合戦となったが双方とも決定打を欠いた。八幡への足利方の反撃に天皇は囲みを破って、賀名生へ落ちられる。救援のため諸国の兵も京都をめざしていたのに、情報の不備から、不吉な落書のとおり天皇は勝つことができなかった。そのあたりのことは太平記はつぎのように述べている。

「路次ノ遠近ニ依テ、縦5日3日ノ遅速ハ有トモ、後攻ノ勢コソ近ヅキタレト、云ヒ立ツ程ナラバ、八幡ノ寄手ハ皆退散スベカリシヲ、今4,5日不_待付_シテ、主上ハ八幡ヲ落サセ給ヒシカバ、国々ノ官軍モ力ヲ落シハテ、皆己ガ本国ヘゾ引返シケル」

邪悪追放のきっかけに落首

尊氏は延文3年（南朝正平13年・1358）4月26日死ぬ。北朝にとって危機であったが、関東の新田義興は討れ、九州の菊池武光も振わぬので安堵した。同年12月義詮は征夷大将軍の宣旨を蒙る。29才である。それにしても「両雄ハ必ズ争フト云フ習ナレバ」と世間は義詮と鎌倉にいる弟の左馬頭（基氏）との仲を危惧した。その噂を耳にした畠山大夫入道道誓（国清）が「京都ニ上リ、南朝を攻め、天下を一統して義詮の御疑いも散じたい」と基氏に進言、京都に登場する。（巻34）延文4年10月上京するが、華美な行列は人目を引き見物の桟敷がたつほど。その翌年5月南朝方を金剛山に追いつめて京都に帰ってくる。そして自分が首謀者になって部将たちと執事仁木右京大夫義長の排除をはかる。（巻35）この部将たちは、和田・楠の軍勢が再び大阪へ進出したと聞いて、将軍の催促もないのに進んで出陣、天王寺でもっぱら義長討伐の作戦会議にふける。

陰謀の噂は広まり、義長は逆に将軍への謀反であると義詮の戴いて対抗の軍勢を集める。義長は義詮を監視し、軟禁していたのだが、義詮は佐々木道譽のはからいで、夜半女装して脱出し、孤立した義長は伊勢へ落ちざるを得なくなる。㉒の落首はそのころのものだ。

「都ニハ仁木右京大夫落タリト、悦バヌ人モ無リケレ共、畿内遠国ノ御敵ハ、是ニ時ヲ得テ蜂起スト聞ヘケレバ、スハヤ世ハ又大乱ニ成ヌルハト、私語カヌ人モ無リケリ」もう人民にとって大乱にはあきあきしていた。世を乱そうする張本人畠山に批難の声が集中した。それが次の落首になった。

「其比何ナル者ノ態ニヤ、五条ノ橋爪ニ高札ヲ立、二首ノ歌ヲ書付タリ。

⑳御敵ノ種ヲ蒔置畠山打返スベキ世トハ知ズヤ

㉑何程ノ豆ヲ蒔テカ畠山日本国ヲバ味噌ニナスラン

「種を蒔く」も「打返す」も畠の縁語。将軍の敵となるような原因をつくる畠山はこらしてやるがよい。㉑どれほどの豆を蒔いて日本国中を味噌にする（つぶす、失敗させる）のだろうか。

策略をもって人を陥れ、平和を再び乱そうとする畠山への激しい怒りが表現され、畠山をほっておいてはいかんという積極性が「世トハ知ズヤ」に出ている。民衆は畠山の本質を見抜いていた。そして追及の手を止めない。

「畠山入道、其比常ニ狐ノ皮ノ腰当ヲシテ、人ニ対面シケルヲ、悪シト見ル人ヤ読タリケン

㉓畠山狐ノ皮ノ腰当ニバケノ程コソ顕レニケレ

腰当、引敷ともいい毛皮の上にひもをつけて腰に着けたまま座布団のように敷いた。それが人を化かす狐の毛皮を用いていた。

畠山は狐の腰当をしている。ばけの皮がはがれたようなもので、本当は人をたぶらかす狐じゃないのか。鋭い追及である。これらとて作者不明だが、さほど学識を必要とする内

容とは思えない。庶民のいいたいことをズバリいってくれた感じだ。この落首をきっかけに京都の人々は騒いだ。そのことを太平記は「今度ノ乱ハ、併畠山入道ノ所行也ト落書ニモシ歌ニモ読、湯屋風呂ノ女童部マデモ、モテアツカヒケレバ」とあるから最近、隣国で起った文化大革命の壁新聞のような騒ぎである。わきあがる世論の中で、畠山は「面目ナクヤ思ケン、暫虚病シテ居タリケルガ、如斯テハ、天下ノ禍何様我身独ニ係リヌト思ケレバ、将軍ニ暇ヲモ申サデ八月四日ノ夜、密ニ京都ヲ逃出テ」とあって京都から姿を消す。世論の完全な勝利に終った。

口遊びの波紋

太平記時代の武士は、理のため、思義のためには死を軽んじて戦に臨んでいる。家名を尚び、それを後世に遺すためには自殺にひとしいような戦死をした例もある。一身の利益のためには簡単に節を変じた例が多いけれども、南北とも天皇は名分をたてる象徴であって、それぞれの政治理念を理解しての、イデオロギーの戦いではなかったからだろう。正統かどうかぐらいしか認識はなかったのではないか。戦う者にとっては、たとえ“大義”でなくとも自分の信ずる義に殉ずれば満足できた。それゆえ、天下の人口に入り、人口の嘲、天下の口遊となり、天下の嘲弄となるのは末代までの恥辱であった。太平記には“人口”を諸所にとりあげているし、舌を飜すなど具体的な表現を与えている。また著者自身が巻11では金剛山を囲んでいた北条方がなすすべもなく降伏したのを「各打死シテ名ヲ後世ニコソ残スベカリケルニ、前代未聞ノ恥辱」と口を極めて慨嘆している。先例に引くのは源平ごろの戦いであって「心ナラズ敵ノ手ニ懸リシヲダニ、今ニ至マデ人口ノ嘲ト成テ、両家ノ末流是聞時、面ヲ一百余年ノ後ニ令」辱」。人口に残ることの恐しさ、100年も消えない人口の嘲をいうことは太平記編集の意図の一端をうかがわせる。

世評というか、天下の人口のことに触れた記事のいくつかをあげよう。

貞和3年（正平2年・1347）楠正行との住吉合戦を前にして細川顕氏は士卒に訓辞する。「（正行に）打負ケ、天下ノ人口ニ落ヌル事、生涯ノ恥辱也ト被」思ケレハ、四国ノ兵共ヲ召集テ『今度ノ合戦又如」先シテ帰リナバ、万人ノ嘲哢タルベシ。相構テ面々身命ヲ軽ジテ、以前ノ恥ヲ洗ガルベシ』」（巻25）

天下の口遊のために失脚したのが細川清氏、やがて逃れて南朝方になる。清氏は将軍の執事で豪勇をうたわれ、単純な男でもあった。信仰も深く2人の子供を石清水八幡で元服させ、八幡六郎、八幡九郎と名付けた。「此事軈テ天下ノ口遊ト成ケレバ、将軍是ヲ聞給テ……」源氏の先祖が八幡太郎などと名付けの口あやかり、天下をねらっているのではないか、と疑われた。（巻36）

また佐々木道譽の大原野の花会が趣向をこらしたものであったことが「洛中ノ口遊ト成テ管領ノ方へ聞ヘケレバ」管領の高経は将軍家の会を馬鹿にしたものだと受取った。（巻39）これらは部将らの讒言のタネになり勢力争いに利用された。

また丹波国の守護の仁木右京太夫頼章（義長の兄）が、山名時代らの軍が京へ上るのを防戦しなかったと評判になる。「今ハ将軍ノ執事トシテ勢ヒ人ニ超タレバ、丹波国ニテ定テ火ヲ散ス程ノ合戦五度モ十度モアランズラント覚ヘケルニ、敵ノ勇鋭ヲ見テ戦テハ中々叶ハジトヤ思ヒケン、遂ニ矢ノ一ヲモ不射懸シミナラズ天下ノ口遊トゾ成ニケル」

以上の三例とも京童の関与が深い。特に頼章の場合は、「火ヲ散ス程ノ合戦、五度モ十

戦モ」してみせてくれという期待感や、「ノサノサト通シ」たなどの句調は、情況が生き生きしていて語り口そのままと受取れる。

当時の物見高い京都の人の様子は徒然草の51段に伊勢から鬼になった女がきたという流言に、洛中の人々が鬼見物に右往左往する話がでている。大へんな騒ぎであり混雑である。太平記では後醍醐天皇が隠岐へ遷されると決まって、八才の第九の宮（恒良親王か）が、幼心を痛められる話が同情を呼んだ。「ツクヅクト思暮シテ入逢ノ鐘ヲ聞ニモ君ゾ恋シキ」と詠まれた歌は「其比京中ノ僧俗男女、是ヲ畳紙・扇ニ書付テ、翫バヌ人ハ無リケリ」とある。（巻４）

そして天皇が隠岐へ出発される時は「京中貴賤男女小路ニ立　テ『正シキ一天ノ主ヲ、下トシテ流シ奉ル事ノ浅猿サヨ。武家今ニ盡ナン』ト所憚ナク云声巷ニ満テ、只赤子ノ母ヲ慕如ク泣悲ミケ」りとある。（巻４）武家をはばからぬ民衆の声といえよう。

また巻17では名和長年が路上の女童の噂話を聞いて、戦死を決心するように書かれている。九州から上洛して京都を占拠した尊氏と争奪戦の続いている時だ。義貞の後から行軍している名和伯耆守長年を「見物シケル女童部、『此比天下ニ結城・伯耆・楠木・千種頭中将、三木一草トイハレテ、飽マデ朝恩ニ誇タル人々ナリシガ、三人ハ討死シテ、伯耆守一人残リタル事ヨ』ト申ケルヲ、長年遙ニ聞テ、サテハ長年が今マデ討死セヌ事ヲ、人皆云甲斐ナシト云沙汰スレバコソ、女童部マデモカ様ニハ云ラメ。今日ノ合戦ニ御方若討負バ、一人ナリ共引留テ、討死セン者ヲト独言シテ……」とある。女童の発言は長年を追いやった。長年ら 200騎はその日「一人モ不残」戦死した。

⑳㉑㉓の落首は民衆の批判的な言論であって、当時の世論をつくり、世論は以上のような口遊みによって沸き立ってゆく。そうした主役をつとめているのが京童であった。

正成が千早城に籠り北条軍を一手に引受けていたとき、いち早く京に攻め上った宮方は赤松円心である。奮戦してこれを撃退したのは河野・陶山の軍勢であった。六條川原に懸けた首は 873を数える。実は戦もせぬ六波羅勢が、手柄顔をしたいばかりに、京内外の一般人を殺して似首を懸けたのだという。「其ノ中ニ赤松入道円心ト、札ヲ付タル首五アリ。何レモ見知タル人無レバ、同ジヤウニゾ懸タリケル。京童部是ヲ見テ、『頸ヲ借タル人、利子ヲ付テ可返。赤松入道分身シテ、敵ノ盡ヌ相ナルベシ」ト、口々ニコソ笑ヒケレ」（巻８）と卑劣な武士のやり方を見破り、戦の残酷をのろう京童を書いている。この話自体も落書的である。

また一方巻19には、恩賞に不満を持ちながらも桃ノ井直常兄弟が、義に殉じて八幡の北畠顕信の軍に捨身の勇しい戦いをしたことを称えて「此比ノ京童部ガ桃井塚ト名ツケ」たという。現代風にいえば、京童の建てた顕彰碑ということになろう。

こうした点をも考えると京童とは情を解し、義にも感ずる、ごく健康な一般の庶民感情をもった者たちと感じとれる。遊侠的であっても自由な偏らない判断をしている。口うるさいけれども、ニュースや政論の伝達者の役をなしている。太平記の編者もこうした口コミ集団からも取材したのではないかとも思われるのである。

先行軍記―平家物語の落首

ここで、いま一度先行の軍記物である平家物語を見てみよう。平家物語には九首の落首がある。

源氏の討手に維盛を総大将にした軍勢が富士川に陣を布き、水鳥の羽音に驚いて逃げ帰ったとき「海道宿々の遊君遊女ども……是はききにげし給ひたりとわらひあへり、落書もおほかりけり」とある。そして「都の大将軍をば宗盛といひ、討手の大将をば権亮（ごんのすけ）といふ間、平家をひらやによみなして

ひらやなるむねもりいかにさはぐらむはしらとたのむすけをとして

富士河のせぜの岩こす水よりもはやくもおつる伊勢平氏かな

上総守（侍大将忠清）が富士河に鎧をすてたりけるをよめり

富士河によろひはすてつ墨染のころもただきよ後の世のため

ただきよはにげの馬にぞのりにける上総しりがいかけてかひなし（以上巻５）

「にげ」は二毛の馬と逃げ、「かけ」は掛けと駆けにかける。馬具のしりがいは上総国で産するもの。

その他には山門の衰微を歎き離山した僧の坊の柱に、「歌をぞ一首」

いのりこし我たつ杣の引かへて人なきみねとなりやはてなむ（巻２）

都遷りのあと寂れてゆく古都の内裏の柱に「なに物のしわざにやありけん……二首の歌をぞ……」（巻５）

ももとせを四かへりまですぎきにし乙城（おたぎ）（愛宕）の里のあれやはてなむ

さきいづる花の都をふりすててかぜふく原（新都は福原）のすゑぞあやうき

のほかは、平家西国落ちのとき、高倉上皇の第四皇子を保護した紀伊守範光が、後鳥羽天皇に即位されたあと、すっかり忘れられてしまっているのを嘆いて禁中に落書したとする歌がある。（巻８）

一声はおもひ出てなけほととぎすおいその森の夜半のむかしを

籠のうちもなをうらやまし山がらの身のほどかくすゆふがほのやど

前の歌は新古今集三、範光が後鳥羽院に奉った歌だが、後者は玉葉集十六、寂蓮の歌、この二首は平家の作者が落首に付会したとされる。

富士川の戦いざまを諷した落首は、おそらく人目の場所に立てられたであろう。落首と作者がいうのは範光の歌だが、註記のように落首ではない。その他は禁中など屋外ではないし、作者も庶民ではない。そしてこれらには雅びやかな和語の伝統が残っている。みてきた太平記の落首の直截な泥くささ、主張もいれた作品とは、対蹠的に別世界のものである。作者の教養や編集態度が根本的に違うといってよい。太平記は旧時代の詩的なものを捨てて事実に即している。太平記は文学性に於て平家に劣るといわれるが、はじめからねらいが違うのである。時代は変っており、生活力の強い庶民が躍動し、新興勢力をめざして武士は血みどろに戦い、かつ奢侈や遊興への欲望も渦まいている。混沌の中に何か新しい息吹があるように思われる。太平記はそうした集団に目を据えている。

京都を中心に起った保元、平治の乱は天皇家と貴族らの勢力争いに武士が巻きこまれた争いであって、庶民にとっては雲の上のこと、論議すべきことでなかった。平家物語の源平の争いは、あれほど栄華と権勢を誇り、それを目のあたりにみた平家が、あれよあれよという間に追い落されゆく運命にあきれかえって言葉もない。あの公達、あの歌人、京を花やかに彩ったエピソードの持主が、このようにして奮戦し悲惨な最期を遂げる。同情と興奮をもって戦いのニュースを求めた。貴族たちも物語を争って聞きたがり、庶民も求めて涙した。盛者必衰のことわりにため息をつき、亡びのあわれと美しさに詩を感じた。これが語物として成長し、流行した理由であろう。

終りに——

太平記に登場する南北の動乱は元弘の変（1331）を起点とし、両朝合体の明徳３（1392）で終るとして60年の長きにわたる。規模も全国に広がり、人民を塗炭の苦しみに追いこんだ。

「従レ之四海大ニ乱テ、一日モ未安。狼煙翳レ天、鯢波動レ地、至レ今四十余年。一人而不レ得レ富二春秋一。万民無レ所レ措二手足一。」これはそも何故と問いかけながら綴られた40巻である。この四十余年について、三十余年とか二十余年と書いた諸本(3)がある。太平記がいつ完成したか、その点に触れる用意はない。しかし私はいまの週刊誌の編集に、なぜこんなに似ているのかと不思議に思う。現代の週刊誌であるから、その類似性をもって云々することは遠慮しなければならない。そう思って太平記の落首を見てゆくと、新聞の見出し役をし語り伝えるメモの役をしたようにも思われてくる。壁新聞であった。妄想だろうか。太平記の二部、三部の編集は各地から何人かの取材者が持寄ったルポを、リライトしている編集者の姿が浮ぶ。そうして事件の結着ごとに、いまの週刊誌の締切りのように締切っていたとするならば、諸本に二十年、三十年の異本があるのも、人名や日付など史実に厳正でない点も、“週刊誌”的という一語で解決すると空想してみたりする。

島津忠夫氏の前出の文によれば、太平記が落首を中心に読まれる事実があったといい、落首ばかりをまとめた巻「太平記抜書」を紹介して、「蓬佐文庫本」の存在をあげている。そうしたことも併せて太平記が、いよいよ不思議な本に見えてくる。

（後記）太平記のルビは印刷所にめんどうをかけると思って一部省略している。なおできあがりを見ると片仮名がひらがなになっているが、そのままにした。また横組のため洋数字になったところもある。

註 (1) 山下宏明「軍記—南北朝期の平家物語と太平記—」国文学解釈と鑑賞・昭和44・3
(2) 鈴木秀三郎「本邦新聞の起原」昭和34・8
(3) 後藤丹治「大系本解説」

高松短期大学研究紀要

第　5　号

昭和50年3月1日印刷
昭和50年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761－01　高松市春日町 960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158